

ビキニ事件半世紀

2003年—2007年の報道、出版、研究について ～今後の解明にむけてのデータ・ノート

市田 真理

1954年米水爆実験で日本の漁船などが被災した「ビキニ事件」から半世紀を経て、多数の報道、出版が行われた。第五福竜丸平和協会ではそれらの資料を集約・整理しており、本稿はあらたに見つかった資料とそれらに基づく研究動向、関係者の活動を、今後の「ビキニ事件」解明に向けて整理した。

はじめに

1954年にアメリカが行った水爆実験で被災した木造船第五福竜丸は、現在東京・夢の島公園内の都立第五福竜丸展示館に保存・展示されている。筆者は、展示館の管理・運営を都から受託している財団法人第五福竜丸平和協会（以下、協会）の研究者として「ビキニ50年」に発表された資料、報道記事等の集約・整理にあたった。

1954年3月1日、アメリカはマーシャル諸島ビキニ環礁で水爆実験を行った。キャッスル作戦と呼ばれる一連の実験で、コードネーム「ブラボー」と名づけられた水素爆弾は、広島型原爆のおよそ1000倍の爆発力であったと推定されている。実験場から東方160kmで操業中のマグロ漁船第五福竜丸（静岡県焼津港）乗組員は、その爆発の光を目撃し、異変を察知した。はえ縄の揚縄作業中に、のちに「死の灰」と呼ばれる放射性降下物をあびた。福竜丸の被災は読売新聞のスクープで報じられ、国内外を震撼させた。乗組員23名は入院・治療を受け、半年後には久保山愛吉無線長が死去した。漁獲物の被ばくが報じられ、放射能を含んだ雨が全国に降った。政府は海洋調査船・俊鷗丸を派遣し、太平洋（ビキニ～赤道海域）の放射能測定等を行った。広島・長崎の被ばくにつぐ放射能被害は市民たちを恐怖におとしいれるとともに、水爆実験反対の世論の高まりは、原水爆禁止の声となり、稀にみる国民的な運動にひろがった。

事件発覚直後より連日の新聞、ラジオによる報道がなされ、医療・核物理関係の研究論文が発表された。被ばくから半年後、乗組員の一人、久保山愛吉の死去に至る間には、新聞の家庭欄や総合雑誌等でも種々論じられるようになった。主なこれらの論文（英文も含む）は、第五福竜丸の保存がすすめられる中で学術的

な資料として編集された『ビキニ水爆被災資料集⁽¹⁾』巻末にリストが掲載されている。また事件直後の科学者・医師たちの活動は武谷三男『死の灰⁽²⁾』に、「死の灰」の分析「放射能雨」測定をはじめとする科（化）学者たちに関しては三宅泰男・協会会長（当時）『死の灰と闘う科学者⁽³⁾』に詳しい。アメリカでは、核物理学者ラルフ・ラップが雑誌に連載したルポルタージュ『福竜丸⁽⁴⁾』が単行本としてまとめられた。事件から展示館開館にいたる歴史を概説したものとしては、広田重道・協会専務理事（当時）『第五福竜丸⁽⁵⁾』がある。

80年代には協会の編集で、パンフレット『第五福竜丸』（英文『Lucky Dragon』）、『母と子でみる第五福竜丸⁽⁶⁾』などが刊行された。2004年までに刊行された関連書籍50点のリストが、『写真でたどる第五福竜丸⁽⁷⁾』に収録されている。

さて2004年、「ビキニ事件50年」という節目に際し、新聞・テレビ等のメディアが早くから動きはじめ、関係者への聞き取りおよび、あらたな資料の発見に尽力した。第1節ではそうしたメディアの動向を2003年から2007年の5年間の動きを中心にまとめる。

協会では、「50年記念プロジェクト推進委員会」を立ち上げ、常設展示のリニューアル、特別展などを行った。また協会役員、専門委員による研究会やシンポジウムで研究発表等が行われた。その記録を2節でまとめる。

関連の書籍出版は研究書、ルポルタージュをはじめ、児童文学、絵本、漫画など多岐にわたる。これらを3節で紹介する。

第五福竜丸元乗組員・大石又七は、ただ一人証言活動を続けている。4節では手記の出版に関して、大石の20年以上にわたる活動とともに紹介する。

事件から半世紀、最近5年間にも関係者・キーパーソンの訃報に接した。ビキニ事件の解明、核廃絶運動

に功労のあった方たちである。5節ではその名前を挙げおまな業績を紹介する。

なお福竜丸は本来「龍」の字を使用しているが、協会では船体以外では「竜」を用いているため、本文ではこの凡例に従った。また放射能被害については、引用以外では「被ばく」とし、第五福竜丸の被害は、総称として「被災」としている。

1. 新聞・テレビ等による新資料発掘

(1) 新聞社による新資料発掘

ビキニ事件50年を前に、2003年頃から新聞社による取材が活発となった。各社が「発掘」した資料は報道後、協会に提供されている⁽⁹⁾。

【静岡新聞】

2003年2月4日から5月2日にかけて木村力記者による連載「第五福竜丸 心の航跡」は60回(本編57回特集3回)にわたり、見崎吉男元漁労長のインタビューをはじめ、元乗組員と遺族への取材を重ね、静岡県内で話題となった(連載後の番外編や資料など加筆し、連載タイトルと同名で2004年3月単行本として静岡新聞社から出版された。同書は第9回平和・協同ジャーナリスト基金奨励賞受賞)。公式な場での挨拶などを除き、見崎が心情を吐露し活字化されたことはきわめて稀であり、事件後口を閉ざし続けている元乗組員の一部はインタビューにも応じている。

【朝日新聞】

大阪本社の「核取材チーム」を中心に、新資料の発見と報道が相次いだ。

広島市立大学平和研究所の高橋博子助教によって発見された「CIA報告書」について大きく報じた(11月16日付)。これは「第五福竜丸が核実験を偵察していたスパイの疑いがある」としてCIAが調査していたことを示す資料である⁽¹⁰⁾。スパイ容疑に関しては、当時米原子力委員長が公言していたことでもあり、この資料で裏付けられた形となった。

同記事によると朝日新聞が独自に米國務省作成の記録を入手し、日本の外務省が乗組員の政治思想を含む資料を在日米大使館に提供し、CIAに協力していたこともつきとめている。

事件後、海上保安庁に船長らが出頭して、船の被災位置などを検討した「航海日誌」はその後所在不明となっていた。その全文複写が米国立公文書館(NARA)に保管されていることも判明した(11月20日付)。この複写は同社を通じて協会に提供され、一部が常設展示されている。

【共同通信】

被災から半年後に亡くなった久保山愛吉無線長の遺体の一部が、病理標本としてアメリカへ送られていたことが、ネバダ州のエネルギー省(DOE)核実験公文書館に保管されている内部文書約200点により確認された。このほか福竜丸乗組員やマーシャル諸島住民の尿がアメリカへ送られた事実なども記されているという(配信記事は12月9日付静岡新聞、北海道新聞等で掲載)。

また同じくDOE核実験公文書館所蔵文書に、原爆傷害調査委員会(ABCC)モートン所長らによる報告書が含まれていることが明らかになった(2004年2月24日付西日本新聞などに掲載)。これには乗組員の治療に米側が関与することを日本側が拒否したことを「希少なデータを失った」と非難していることが書かれている。

(2) ビキニ水爆実験被災50年の報道

各紙が3月1日の社説・コラムでとりあげたほか、関係者へのインタビュー等を連載で報じた。

以下連載タイトルと期間のみ記録する。

【朝日新聞】

2003年11月16日～18日「ビキニ被曝50年～マーシャルは今」(3回)。2004年1月26日～28日「ビキニ被曝50年～乗組員たち」(3回)。2004年2月25日～27日「被災船を追って」(3回・高知版)。2004年2月29日～3月2日「ビキニ被曝50年～米軍兵士」(3回)。

【毎日新聞】

2004年2月29日～3月7日「ビキニ事件半世紀の刻印」(7回)。2004年2月28日～3月8日「ビキニ半世紀」(8回・静岡版)。

【読売新聞】

2004年2月29日～3月2日「あの海から ビキニ被ばく50年」(3回)。

【高知新聞】

2004年3月1日～3月18日「灰滅の海から」(13回)。

2004年8月7日～15日「残灰あせず—ビキニ水爆50年展より」(9回)。2004年12月17日～27日「残灰滅の海から」(10回)。

【静岡新聞】

2004年2月23日～29日「50年目の証言」(7回)

【共同通信】

2004年2月18日～3月8日頃「検証ビキニ死の灰」(10回)。岐阜新聞、茨城新聞、東奥日報、中日新聞、信濃毎日新聞、千葉日報、神戸新聞、西日本新聞など

12月20日には、日本とカナダの研究チームが北極の氷から「死の灰」を抽出したことが報じられた(朝日新聞・毎日新聞)。1994年に採取した氷柱をカナダ国立科学研究所環境技術研究所の主任研究官だった、工藤章・京都大学名誉教授らが分析したもので、原爆投下やビキニ水爆実験による核汚染が、北極に刻印されていることが明らかになった。

また、読売新聞静岡支局は1991年の公開時に非公開だった外交文書を情報公開請求して入手、協会に提供した⁽¹¹⁾。

2005年には汚染マグロの検査打ち切りの背後にアメリカ原子力委員会の強い関与があったこと(高橋博子による資料発表・1月31日付しんぶん赤旗)、被ばくした乗組員の被害—生殖機能が一時的に低下し、放射能との因果関係が疑われること—を日米両国の関係機関が共有しながら、乗組員たちには秘匿していたことを裏付ける文書が発見された(共同配信・2月28日付 山形新聞、信濃毎日新聞、岩手日報、大分合同新聞などで掲載)。

(3) テレビ・ラジオによる報道

おもなオンエアのみ列挙する。詳細は『ビキニ水爆実験・第五福竜丸被災50周年記念プロジェクト報告⁽¹²⁾』の一覧表を参照されたい。

「第五福竜丸 被曝から50年～関係者のそれぞれの思い」(筑紫哲也NEWS23・TBS 3月1日)

きょうの世界「マーシャル・核による島民離散を追って」(NHK BSニュース 7月5日)

「映像記録 ビキニ事件の半世紀」(NHKBSドキュメンタリー 7月9日)

「漁士の決断～第五福竜丸乗組員の50年」(テレビ静岡 7月24日)

「終わらないビキニ事件～政治決着50年目の波紋」(静岡第一テレビ 9月18日)

「わしも死の海におった 証言・もう一つのビキニ事件」(南海放送NNNドキュメント 10月10日)

ラジオ放送「古座町 平和・古座町から世界へ」(南紀みち紀行・南海放送 2月29日)〈2004年芸術祭参加作品「第五福竜丸被災50周年～ちいさな町・和歌山県古座町からの訴え」〉

なお、2005年にはテレビ朝日「ザ・スクープスペシャル」(8月7日放送)ではビキニ事件が特集され、検証された米側の資料が放送後に協会に提供された。

2. 協会関係者・専門委員の活動

(1) 協会関係者

川崎昭一郎(協会会長)『第五福竜丸—ビキニ事件を現代に問う』(2004 岩波ブックレット No.628)

副題にもあるように、ビキニ事件を過去のものではなく現代につながるものとしてとらえ、当時から今にいたる科学者のありようについても問いかけている。

山村茂雄(協会理事)「共感と願いと—清瀬・療養所の時代から」(「手紙—託された心」のしおり⁽¹³⁾、「ビキニとは?—ビキニ水爆実験50年 第五福竜丸は航海中です」(「UNIV.CO—OP」No.323 2004年4月号)など。

岩垂弘(ジャーナリスト・協会評議員)『「核」に立ち向かった人びと』(日本図書センター 2005)核廃絶運動に尽力した50人の評伝。その冒頭に紹介されるのが、廃船となった第五福竜丸の保存をよびかける投稿(朝日新聞1968年3月10日付)を行い、以後の保存運動に大きな影響を与えた武藤宏一と、協会初代会長で地球化学者の三宅泰雄である。

安田和也(協会事務局長・主任学芸員)『母と子でみる水爆ブラボー 3月1日ビキニ環礁・第五福竜丸』(共著・草の根出版会 2004)、『フィールドワーク 第五福竜丸展示館』(共著・平和文化 2007)を発行した。いずれも「福竜丸を知らない世代に伝えたい」との意図で中学生以上を読者層に編集されている。『水爆ブラボー』はフォト・ジャーナリスト豊崎博光との共著であるため写真が多数収録され、写真資料集としても活用できる。

安田事務局長は、日常業務でのガイドトークのほか、各地で開催されている巡回展・特別展では第五福竜丸とビキニ事件について講演している。

なお、協会は「核兵器廃絶に向けての活動」により、2006年、第12回平和・協同ジャーナリスト基金賞を授与された。

(2) 協会専門委員

協会はビキニ事件50年を機に、研究者、専門家に専門委員を委嘱し、協力を得ている。

山下正寿 元教師、「四万十楽舎」楽長、高知県ビキニ水爆実験被災調査団副団長。80年代に高知県幡多高校生ゼミナールとともに、県内の被ばく船と乗組員たちの聞き取り調査をまとめた『ビキニの海は忘れない』(平和文化 1988)の続編として、『もうひとつのビキニ事件—1000隻をこえる被災船を追って』(平和

文化 2004年・第10回平和・協同ジャーナリスト基金賞受賞)をまとめた。これまでの調査を踏まえ、沖縄・韓国での被害調査を行った記録で、山下は本書の発行後、調査団を被災者支援するための「高知県太平洋核実験被災支援センター」に発展させ活動している。⁽¹⁴⁾

豊崎博光 フォト・ジャーナリスト。世界の核被害を撮り続けてきた豊崎は、アメリカの公開資料を収集・分析し、自身の30年におよぶ取材の集大成として『マーシャル諸島 核の世紀1914-2004』(日本図書センター 2005。同書は同年日本ジャーナリスト会議JCJ賞受賞)を上梓した。上下巻計1278ページには、クロスロード作戦以来のマーシャル諸島における核被害と世界の核情勢分析が記されている。

本書出版後の2006年4月にもマーシャルを取材し、メジット島の住民らが核実験により被ばくさせられているにもかかわらず、米政府によって「被害は無い」とされている事実、核賠償請求裁定委員会(NCT)の資金が底をつき、補償を受けられないまま亡くなっているマーシャルの人々の実態を告発している。⁽¹⁵⁾

また、ビキニ被災50年記念企画として写真展「ビキニ水爆50年・地球被曝60年—核がつくりだした光景」(2004年11月20日～2005年1月23日)を開催。『母と子でみる 水爆ブラボー』(前出)を出版した。

枝村三郎 静岡県歴史教育者協議会元会長、静岡県近代史研究幹事。「静岡県近代史研究」(静岡県近代史研究発行)に発表してきた研究をもとに「平和をもたらした龍—ドキュメント第五福竜丸事件」(自費出版)を出版した。乗組員の同級生らによるいち早い署名活動、焼津の中高生による地元の実態調査など、郷土史を探究し続けている枝村の労作である。巻末には静岡県内の漁港別慰謝料配分が掲載されている。

島田興生 フォト・ジャーナリスト。ビキニ被災50年記念事業で写真展『曝された楽園、いのち、子どもの未来 ロングラップ1974～2004』(5月15日～6月27日)を開催し、同名タイトルの写真パンフレットを発行した。写真パネルは巡回展示(広島市、長崎市、高知市、立命館大学国際平和ミュージアムなど)で活用されている。島田は85年から91年にマーシャル諸島共和国に在住しており、帰国後にはロングラップの人々の自立のために船を贈る「ブンブンプロジェクト」を展開している。写真ルポ「帰島をはばむ水爆実験の傷跡」(月刊「自然と人間」自然と人間社 04年4月号)「第五福竜丸の彼方にあった真実」(「国際協力」JICA 04年8月号)を発表した。

市田真理 協会研究員・学芸員。主として資料整理

と企画、編集を担当している。「死の灰」をはじめとする所蔵現物資料の再整理にあたり、図録『写真でたどる第五福竜丸』に目録を掲載した。

ビキニ水爆実験被災50周年事業では、事件当時の市民の記憶を記録する手記を公募し、手記集『わたしとビキニ事件』⁽¹⁶⁾を編集・発行した。市民の手記には、原爆マグロ、放射能雨、原水爆禁止署名活動など生活を直撃した当時のようすが生々しく綴られている。協会が所蔵する当時乗組員と家族らに送られてきた3000通を超えるお見舞や激励の手紙を、ボランティアの会の協力のもとに整理し、04年、05年、07年に特別展示を企画した。また同時に1976年の開館から30年にわたり館内に置かれている「来館者ノート」と、修学旅行などの見学後に送られてくる感想文などをボランティアとともに整理し、特別展で展示、開館30年記念誌に収録した。また、共著で『フィールドワーク第五福竜丸展示館』(前出)を出版した。

(3) グローバルヒバクシャ研究会

グローバルヒバクシャ研究会は、ビキニ水爆被災50年を機に創設された、若手研究者を中心とした研究会である。研究会設立の経緯と成果が『隠されたヒバクシャ 検証=裁きなきビキニ水爆被災』(グローバルヒバクシャ研究会編 凱風社 2005)にまとめられている。「ビキニ水爆被災は、原水爆禁止の原点ともいわれながら、実はその被災問題はマーシャル諸島でも日本でも、アメリカ政府へ事実に基づく責任を果たさせないまま、一定の金銭の支払いと引き換えに『完全決着』とされている」が「ビキニ水爆被災をこのまま決着済みの問題として封印してはなるまい」として築かれたネットワークでもある(同書まえがきより)。執筆者はいずれも協会専門委員であり、同書にも収録されている「ビキニ水爆被災50周年研究集会」⁽¹⁸⁾の報告者・パネリストでもある。

1974年からマーシャル諸島の現地取材を重ね、『非核太平洋—新編 棄民の群島』(筑摩書房 1991)などの著書のある**前田哲男**(東京国際大学教授・当時、現沖縄大学客員教授)は同書で第一章「ビキニ水爆被災の今日的意味」を担当し、マーシャル諸島核実験場の歴史的、地理的意味を重層的に概括し、「グローバルヒバクシャ」の出現と実態を描いている。

高橋博子(広島市立大学平和研究所助教・協会専門員・アメリカ史)は、アメリカの資料発掘に力を入れ、これまで憶測されてきたことを米側資料で裏づけし、発表している。後述の竹峰誠一郎と日本平和学会の分

科会グローバルヒバクシャ研究会共同代表を務める。同書では「第五福竜丸被災とアメリカ政府の対応 隠された被ばく情報」を執筆。発見された資料はメディアや研究会で逐次発表されている。

2008年2月には、ビキニ事件で明らかとなった放射性降下物の脅威が、核戦略及び米国内の民間防衛計画の転換点となったことなどを分析した『封印されたヒロシマ・ナガサキ 米核実験と民間防衛計画』(凱風社)を上梓した。

中原聖乃(中京大学・名古屋市立大学非常勤講師・文化人類学)は、同書で「挑戦するロンゲラップの人びと—生活圏再生の民族誌」で、メジャト島に避難・移住させられたロンゲラップ環礁の人々の生活実態を観察しながら、見舞金、土地補償金がコミュニティにもたらした社会的混乱を解析している。関連論文として「被曝補償導入による政治実践の変容に関する一考察」(「社会学研究<中京大学社会科学研究所紀要>」第25巻2号 2005)がある。

また、後述の竹峰との共著で『マーシャル諸島ハンドブック 小さな島国の文化・歴史・政治』(凱風社 2007)を出版した。歴史や核問題のみならずローカルフードの紹介や旅行情報なども掲載されたユニークなガイドブックになっている。

竹峰誠一郎(早稲田大学大学院・和光大学非常勤講師・同研究会共同代表・国際関係学)社会学のアプローチで、これまで実態解明がされていなかったアイルック環礁の「隠されたヒバク」のフィールドワークを中心に幅広い研究に着手し、同書では「塗り変えられる被災地図 隠されたヒバクシャを追う」「ヒバクは人間に何をもたらすのか 忍び寄る核実験の影」にまとめている。

また、『ヒバクの島マーシャルの証言 いまビキニ水爆被災から学ぶ』(安斎育郎・立命館大学国際平和ミュージアム館長と共著 かもがわブックレット 2004)、「ビキニとヒロシマ・ナガサキをつなぐ—グローバル・スケールの汚染とABCC」(グローバルヒバクシャ研究会編『市民講座 いまに問うヒバクシャと戦後補償凱風社 2006』)を公表、中原との共著で前述の『マーシャル諸島ハンドブック』を発行した。

(4) ビキニ調査研究会

静岡県の平和・原水爆禁止運動関係者により、1996年3・1ビキニデーを契機に「ビキニ被災の全容解明をめざす静岡県調査研究会(略称・ビキニ研)」が立ち上げられ、翌97年3・1ビキニデーに「第一回研究

交流集会」(3・1ビキニデー静岡県実行委員会共催・07年まで11回、毎年報告集が刊行されている)が開催された。これまでに静岡、焼津の歴史研究者、医療関係者をはじめ、高知、三崎(三浦市)などの被災船調査報告、外交問題やマーシャル諸島の核被害などについて報告がなされた。

静岡での調査研究会の発足は、全国におよぶ被災船乗組員の健康被害をはじめ「なぜこれまで事件の全容は解明されてこなかったのか」を問題意識に、静岡、焼津特有の要因、米ソ冷戦下での情勢、日米関係、乗組員の健康被害、補償問題、マーシャル諸島の被害の実相究明などを、「第五福竜丸の地元」から調査研究しようとするものである。

ビキニ研はまた、元乗組員・小塚博がC型肝炎により深刻な肝臓障害となり、「治療費だけでも免除してもらえれば」という小塚を支援するため、同研メンバー、医療団体、弁護士などを中心に「小塚博さんを支援する会」を結成し、静岡県や厚生省(当時)にはたらきかけた。2004年8月4日には小塚に対する厚生省社会保険審査会から「船員保険の再適用」の採決を受けた。この支援に元乗組員として携わった大石又七は、さらに船員保険による元乗組員の遺族年金にも取り組み、一部遺族に支給されている。(05年秋より)

3. 関連書籍の出版

『ビキニ事件の真実 いのちの岐路で』(みすず書房 2003)、『これだけは伝えておきたい ビキニ事件の表と裏』(かもがわ出版 2007) 第五福竜丸元乗組員大石又七は『死の灰を背負って』(新潮社 1991)に続き二冊の手記を上梓した。大石の活動と出版については別項で詳述する。

『千の波 万の波—元第五福竜丸漁労長 見崎吉男のことば』(自費出版 2006) 第五福竜丸漁労長だった見崎吉男氏の初の聞き書き集。見崎の感懐・心情を中心に構成されている。静岡県内の有志によって編集・発行された。

『今日もエンマン』(多田智恵子 健友社 2004) 青年海外協力隊員としてマーシャル諸島共和国キリ島に赴任していた多田智恵子によるルポ。キリ島はビキニ島住民たちの「避難先」となった独立島で、人々は放射能に汚染された故郷に帰れずにこの島で暮しており、多田は島の小学校教師として2001年から2年間滞在した。アメリカの援助物資に頼る生活を余儀なくされている人々の暮らしを鋭く観察し、ときには厳しい言葉を使いながらも、核実験で運命を変えられてし

まった人々に誠実に寄り添っている記録でもある。専門の算数を教えながら、ビキニの記憶がない世代のビキニアンに核実験被害とヒロシマ・ナガサキを伝えることも忘れない。エンマンはマーシャル語で「元気」[good] という意味。

『バラが散った日～第五福竜丸と久保山すず』（「BE LOVE」講談社 2004年 9 月号 漫画・立木美和）静岡の生協で平和活動にも参加する漫画家川口智子原作の漫画。これは焼津でビキニ事件研究をライフワークとする飯塚利弘（協会評議員）の『死の灰を超えて・久保山すずさんの道』（かもがわ出版 1993）を下敷きにしたもので、被ばく半年後に死去した久保山愛吉の妻すずの生き様を、女子中学生の心の成長と絡めた青春漫画である。バラは、生前愛吉が愛した花で、死去後もすずが丹精こめて育て、現在各地に株分けされ「愛吉・すずのばら」と呼ばれている。

『第五福竜丸を最も愛したジャーナリスト 白井千尋の遺した仕事』（白井雅子編 光陽出版社 2004）、廃船処分となった第五福竜丸が夢の島に捨てられた当初より報道し、保存運動を応援した赤旗記者白井千尋の記事やメモで構成。

『船ゆうれいのぶんじい～わしは水爆実験の火の玉を見た』（武政博 青い地球社 2004）高知在住の詩人で元船員の武政博が児童文学誌「青い地球」に連載した創作童話。かつてビキニ水爆実験で被災した船と子どもたちの物語。

『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』（ベン・シャーン絵 アーサー・ピナード構成・文 集英社 2006）ビキニ事件をルポルタージュしたラルフ・ラップ博士の「福竜丸」（雑誌「ハーパーズ・マガジン」で連載）には、画家ベン・シャーンが挿絵を描いた。シャーンはのちにタブロー「ラッキードラゴンシリーズ」をまとめるが、そのモチーフとなった素描などを構成し、詩人のアーサー・ピナードが言葉を添えた。展示館をはじめ各地で複製画展や特別展が開催され話題となった。同書は2006年度日本絵本賞受賞。

『エネルギーレビュー』2003年 8 月号（エネルギーレビューセンター）は「特集 第五福竜丸事件から50年」を組み、ビキニ事件の歴史的意義を専門家・関係者が振り返った。以下目次を紹介する。

市川龍資（元放射線医学総合研究所科学研究官）「環境放射能研究体制の整備—放射線防護の基礎を気付いた歴史的意義」／村尾清一（日本エッセイスト・クラブ理事長・元読売新聞記者）「“死の灰” スクープまで—被災事件の報道を振り返る」／池田長生（日本アイ

ソープ協会顧問・筑波大学名誉教授）「短時間で白い灰の正体分析—役に立った核分裂生成物研究の経験」／浜田達二（日本アイソープ協会顧問）「マグロの放射能検査」／佐伯誠道（放射線医学総合研究所名誉研究員）「手作業のデータも高い評価—海洋生物研究、魚市場と直結」／岡野眞治（放射線影響協会研究参与）「俊鶴丸による南方海域の調査」

『海員』2004年 4 月号（全日本海員組合）は「特集 第五福竜丸被災から50年」を組み、大石又七（第五福竜丸元乗組員）「ビキニ事件と私」、永田浩三（NHKプロデューサー）「ビキニ事件を今 あらためて考える」、山口由二（大東文化大学助教授）「マーシャル諸島共和国の調査を終えて」大野一夫（全日本海員組合教宣部）『『船員しんぶん』にみる核兵器と原水爆実験に反対する海員労働運動』ほか、インタビューなどを発表した。

『生活協同組合研究』342号（生協総合研究所2004年 7 月）では西村一郎（財団法人生活協同組合研究所研究員）のレポート「針路は非核の海—50周年目の第五福竜丸」が掲載された。

4. 大石又七の活動と出版

(1) ビキニ事件を語り続ける

第五福竜丸元乗組員・大石又七は、自宅で展示館で、遠くは海外で、ときには修学旅行生たちの宿泊先まで出向き自身の体験と想いを語り続けている。その講話は1984年から2007年までのべ550回に及ぶ。

大石は、14歳で漁師になり、第五福竜丸では冷凍士を勤め、ビキニ水爆実験に遭遇する航海の中で20歳を迎えた。他の乗組員と同様、被ばくにより人生がすっかり変わってしまった。入院中は久保山愛吉と同室で、久保山の容態が悪化し、意識混濁、昏睡、危篤をつぶさに目撃し、「次は誰か、自分の番は、そんな恐怖で固唾を呑みながら見守り続け」（『これだけは伝えたい ビキニ事件の表と裏』以下、「表と裏」1章）死去に立ち会うこととなった。

1955年に退院後、焼津市近郊の実家に帰るが、「偏見や差別、見舞金に対する妬みまでが生まれ、それに耐えられなくなって、東京の人ごみの中に逃げ出した」（「表と裏」プロローグ）のだった。大石は沈黙する。その大石の心を動かしたのは、「話をきかせてほしい」と頼んだ中学生たちの熱心さであった。その前提はあった。

ひとつは第一子の死産だった。被ばくの影響を疑わずにはいられない。さらに、消えてしまったはずの第

五福竜丸が夢の島で「発見」され、保存の取り組みが始まったこと、なによりも米ソをはじめとする核開発・核実験が拡大することへの怒りがあった。核兵器の恐ろしさを誰かが言わなければ、それを知っている当事者が言わなければ、との思いが募った80年代に、大石は子どもたちに語り始める。

（2）工藤敏樹との協働

秦小夜子（協会職員・当時）のすすめもあり、体験を書き始める。

「口では話せないことでも文字なら言える。自分史でも書いておけば、書いておくだけでいいのだからと、そんな程度に思っただけで始めた。(略)・・・何度も考え、書きなおし、足かけ五年、われながらよく続いた。(略)・・・しかしいくら自分にたぎる思いがあっても、それをみんなにわかってもらえるように表現するのはとても難しい。でも被爆に対する怒りや仲間を失った悔しさを、俺はとても我慢できない。納得できるまで俺は言うぞ、言い続けるぞ。いつの間にかそんな気持ちになっている自分も、これまでは考えられなかった」(『死の灰を背負って』あとがきより)。

NHKの特別番組『廃船』の工藤敏樹ディレクターとの出会いが、手記の出版を後押しした。が、一方で仲間の死を思うとき、「不本意な死、人間にとってこれほどの不幸はない。自分も同じ境遇に立たされながら、俺はまだ幸いにも生きている。・・・『余分なことを言うな。傷つくのはだれだと思っているのか』・・・そんな言葉も頭の中をかすめて、急に鉛筆が重くなる。書いてはいけないことを俺は書いているのかもしれない。みんなが忘れるのをじっと待つのが、俺たち被爆者にとって一番いいことなのだ。」(同書)と思悩みながらの執筆となった。

大石の手記『死の灰を背負って』は工藤の後輩たちによってドキュメンタリー『又七の海～ビキニ死の灰をあびた男の38年』⁽²⁰⁾として映像化される。番組は反響をよび、大石の証言活動も増え、節目ごとに取材を受け続けることとなった。

（3）工藤爽子はじめ応援者との協働

1992年、C型肝炎の感染がわかり、肝硬変と診断された。被災後の治療での輸血による感染だった。強い副作用の出る薬での治療を受けながら、それでも学校からの講演依頼などは途切れず、可能なかぎり語り続けた。肝炎治療は成功したもののガンが見つかる。

2冊目の手記『ビキニ事件の真実』で、闘病と手術

を「いのちの岐路」と表現する。手術は成功し無事退院するが、「退院後は快復とともに仕事量も増えた。講演に出かけることも続いた。お母ちゃんはそのたびに俺の分まで働く。長い間には不満も出てくる。生活も楽ではないのに、話に出かけるのはもうよそうかと時々思う。俺が話したからといって、世の中よくなるわけでもない」(同書)とも考える。それでも自身の思いを胸の奥底にしまい続けたまま死んでいった仲間たちを思うと、やめるわけにはいかない。大石は時に亡くなった仲間の遺族を訪ねる。マーシャルにも赴き現地のヒバクシャと交流する。病に苦しむ仲間を見舞う。

大石と同様、輸血でC型肝炎ウィルスに感染した小塚博（静岡県在住）は、ウィルスが膵臓にも感染し頻繁に入退院を繰り返していた。みかねて静岡の医療関係者や平和団体による救済運動が始まる⁽²¹⁾。大石は小塚の治療に船員保険の再適用がされるよう申請する際、寝たきりの小塚の代理人として厚生省社会保険審査会の公開審査に臨んだ。そこで初めて第一子の死産について「本当のこと」を明かす。「俺は死産だった最初の子どもが<奇形児>であったことを、これまで妻にも隠していた。いや、隠していたわけではない、怖くて言えなかったのだ。初めての子どもを亡くし悲しむ妻に、惨たらしい追い討ちかけるようなことはとてもいえなかった。この黒い重荷は41年間も俺の中でくすぶりつづけていたのだ」(同書)。申請が通り、小塚には保険が再適用されることになった。しかし大石はもろ手をあげて喜ぶことはできなかった。遅い、遅すぎる、これまでに死んでいった11人にも救済の手が差し伸べられるべきだったと憤る⁽²²⁾。

同書はまた、工藤敏樹ディレクターの妻で編集者の工藤爽子、「又七の海」を報道番組で紹介した長沼士朗NHKディレクター（当時）、平和教育に熱心な川口重雄教諭・マグロ塚の会や協会関係者の協力のもとに刊行された。

（4）第五福竜丸展示館との協働

前出2冊の手記をまとめたのちにも、あらたな資料や研究が発表され、大石は探求を続けていた。日米両政府による「政治的解決」の裏には、原子力発電の日本への導入に関する取引や、アメリカCIAによる対日心理作戦の思惑もあったこと⁽²³⁾、米国立公文書館に保管されている「当直日誌」の複写と展示館に保管されている現物の3月1日の記述が異なることも判明した⁽²⁴⁾。3冊目の手記『表と裏』の出版にあたり、インタビュー

に「資料が出るたび、私の把握していた事件の概要が変わる。その記録の必要性を感じた」(朝日新聞・2007年11月8日)と語っている。

筆者は同書の企画から手伝う機会を得、編集の傍ら聞き取りをすすめた。3冊に通底するのは「仲間たちの不本意な死」への怒りと、事件を忘れさせようとする圧力・理不尽さへの反発である。一方で未来を担う子どもたちに伝えたいとも語る。同書は、その思いを共有する協会と、2001年から発足した第五福竜丸ボランティアの会との協働で製作されたともいえる。

マスコミなど大きらいだったと述懐する大石だが、第1節で取り上げた新聞、テレビ番組の大半に大石は登場する。筆者は講演先でもテレビカメラに密着され、記者に呼び止められる姿を幾度となく目にしている。仕事をかかえ、万全ではない体調にもかかわらず、取材の合間にも講話を続けるその姿には、熱意を超えた凄まじい気迫を感じた。

大石は自分の変化に驚いているというが、話を聞いて子どもたちも変わっていく。大石の生き様に触れ、自らの生き方を真剣に考え始める。講話が15年続いている学校もある。中学生時代に大石の話聞き、現在母校の教師として大石を学校に招いている人もいる。自分のいなくなった将来にも事件を伝えていくためにと呼びかけられ、募金でつくられたマグロ塚の運動に家族じゅうでかわり、自分たちが「伝える側」になったという人もいる。誰よりも変わったのは、ビキニ事件の究明と継承をライフワークに選ぶようとしている筆者自身かもしれない。

忘りたい、隠したい、だが本当の悩みを知ってもらいたいという大石の葛藤を受止める世代も確実に育ってきている。そんな若者に、最近では自分の被ばくが原因で娘の結婚話が何度も破談になったことまでも明かす。筆者は、大石が子どもや孫とともに展示館を訪れるのに出会うたび、「伝える」努力が周りを変えていくことを実感せずにはいられない。

テレビのインタビューで「わたしは命ある限り語り続ける。自分がいなくなってもこの船が、第五福竜丸が伝え続けてくれるでしょう」と応えている。協会とボランティアの会の大石又七との協働はこれからも続いていく。

5. 関係者の訃報からみるビキニ事件50年

おわりに、ビキニ事件との関わりの深い、最近の物語者を紹介する。

清水栄・京都大学名誉教授、2003年12月13日88歳で

死去。焼津に帰港後の第五福竜丸を調査し、「死の灰」を採取。分析結果から水爆であることをつきとめた。

三好和夫・徳島大学名誉教授、2004年11月9日、90歳で死去。第五福竜丸乗組員は東大病院と国立東京第一病院に分かれて入院したが、東大の主治医。乗組員のC型肝炎ウィルスの感染について、「感染と被ばくは一体のものとして考えるべき」とコメントした(毎日新聞、1995年11月14日)

熊取敏之・元放射線医学総合研究所(放医研)所長、2004年12月11日83歳で死去。国立東京第一病院での乗組員の主治医。ビキニ事件を契機に設立された放医研で乗組員の健康診断を続けた。放射線医学、血液学者として原爆医療審議会長、放射線影響協会理事長などを歴任した。

ラルフ・ラップ(Ralph E. Lapp)、2004年9月7日、87歳で死去。ビキニ事件から3年後の1957年来日し、福竜丸乗組員の証言など集め、翌年『福竜丸』を発表した。マンハッタン計画に加わるが、無警告での原爆投下に反対し、戦後は核の脅威を告発・啓蒙し続けた。

近藤康男・東京大学名誉教授・農業経済学、2005年11月25日、106歳で死去。ビキニ事件の漁業への影響、被害についての分析・研究の貴重な論集『水爆実験と日本の漁業』(東大出版会、1958)を執筆・監修した。

ジョセフ・ロートブラッド(Joseph Rotblat)、2005年8月31日死去。ビキニ事件の甚大な被害を知り、パトリック・ラッセルとアルバート・アインシュタインのよびかけで11名の科学者らが署名した「ラッセウ＝アインシュタイン宣言」の発表会見では議長を務め、「宣言」がよびかけたパグウォッシュ会議で長年にわたり指導的役割を果たした。1995年同会議とともにノーベル平和賞受賞。「宣言」50年記念講演会(2005年7月5日、協会主催)で講師・小沼通二・慶應大学名誉教授の提案により、会参加者から博士へメッセージが送られ、2週間後に博士より返信が届いた。

小川岩雄・立教大学名誉教授、2006年6月13日、84歳で死去。湯川秀樹、朝永振一郎両博士とともに、第一回パグウォッシュ会議に出席。1972年立教大学で「核問題概論」の講座を開設し、定年まで続けた。長らく協会理事のちに顧問。

ジョン・アンジャイン(Jhon Anjain)、2004年7月20日、83歳で死去。ビキニ水爆実験で「死の灰」を浴びたロンゲラップ島の村長(当時)。ジョンの三男レコジは、1972年白血病で亡くなり、アメリカ政府の認める最初の「水爆実験犠牲者」となった。自身と家族の被ばく体験と島の人々の苦しみを多くの人に訴える

ため尽力し、74年に初来日、2004年の「ビキニデー」参加が四度目で最後となった。⁽³²⁾

ネルソン・アンジャイン (Nerson Anjain)、2006年12月28日、80歳で死去。ジョン・アンジャインの弟で、兄同様ロンゲラップ島の村長を務めた。1975年環境保護団体グリーンピースの船に乗り、パスポートを持たずにビキニデーにやって来た。以後3・1ビキニデー集会や原水爆禁止世界大会に何度も参加。1992年には第五福竜丸展示館を訪問した。

田中里子・東京地域婦人連合(地婦連)常任参与、2007年3月28日、81歳で死去。地婦連事務局として第一回原水爆禁止世界大会に参加。1978年第一回国連軍縮特別総会ではNGO代表として核廃絶を訴えた。協会評議員。⁽³³⁾

猿橋勝子・地球化学者、2007年9月29日、87歳で死去。気象研究所で死の灰の分析をする。大気・海洋放射能汚染の調査研究に携わる。1981年エイボン女性大賞、1993年三宅賞(地球化学協会)受賞。「女性科学者に明るい未来をの会」設立し、猿橋賞を創設した。協会設立時より評議員、理事歴任。⁽³⁴⁾

また、トルーマン大統領に水爆開発を進言して以来、歴代米政権の核政策に発言力を持ち「水爆の父」とも呼ばれたエドワード・テラー博士(Edward Teller 2003年9月9日95歳で死去)、原爆開発「マンハッタン・プロジェクト」で中心的役割を果たし、トルーマン大統領が水爆開発を決断した50年に反対声明を発表し、58年には核実験をやめるよう提言した、ノーベル物理学賞受賞者ハンス・ベテ博士(Hans.A.Bethe・米コーネル大学名誉教授、2005年3月7日98歳で死去)を付記する。

なお、ここにあげた資料はすべて第五福竜丸展示館で閲覧が可能である。本稿での整理・紹介が、今後のビキニ事件に関する研究の一助になれば幸いである。

《注》

- (1) 三宅泰雄・檜山義夫・草野信男監修 第五福竜丸平和協会編『ビキニ水爆被災資料集』(東京大学出版会 1976)
- (2) 武谷三男『死の灰』(岩波新書 1954)
- (3) 三宅泰雄『死の灰と闘う科学者』(岩波新書 1972)
- (4) ラルフ・E・ラップ『福竜丸』八木勇訳(みすず書房 1958) Ralph.E.Lapp "The Voyage of the Lucky Dragon" Harper&Brothers New York 1957/1958
- (5) 広田重道『第五福竜丸—その真相と現在』(白石書店 1977)
- (6) 第五福竜丸平和協会編『母と子でみる 第五福竜丸』(草土文化 1985) 協会編・発行パンフレット『第五福竜

丸』1989

- (7) 第五福竜丸平和協会編『ビキニ水爆実験被災50周年記念図録 写真でたどる第五福竜丸』(平和のアトリエ発売 2004)
 - (8) ビキニ水爆実験被災から50年にあたる2004年・2005年に、50周年記念プロジェクト推進委員会を立ち上げ、事業を行った。常設展示のリニューアル、図録出版、記念上映会—映画『第五福竜丸』と新藤兼人監督の記念講演、岡本太郎「明日の神話」原画展、島田興生写真展、現代アート展、手紙展、豊崎博光写真展、巡回特別展、手記の公募と出版など、事業の経緯と詳細は『ビキニ水爆実験・第五福竜丸被災50周年記念プロジェクト報告』(以下、報告)参照(非売品・2006)。
 - (9) 前出「報告書」、資料編に一覧と記事が掲載されている。
 - (10) 資料内容と解説は、「Intelligence」No.4(20世紀メディア研究所 2004)『隠されたヒパクシャ』(凱風社 2005)。
 - (11) 読売新聞静岡支局の調べによると、ビキニ事件に関する文書はファイル12冊あり、うち7冊が1991年に公開された。支局が入手した残り5冊は、外交文書約2500頁。91年に公開されたものとの重複文書も含まれる。海上保安庁の文書約50頁と併せて協会に提供された。未整理のため現在展示館での閲覧は不可。
 - (12) 前出「報告書」資料編に一覧が掲載されている。
 - (13) 福竜丸だよりNo.313・2004年10月
 - (14) 福竜丸だよりNo.323・2005年10月
 - (15) 福竜丸だよりNo.329・2006年6月、同No.330・2006年8月
 - (16) 手記集『わたしとビキニ事件』(2005 館内販売のみ。現在在庫僅少のため閲覧のみ可能)は被災50年プロジェクトの中で企画され、新聞、公募サイト、公募雑誌などで応募をよびかけた。海外を含む55編の応募があり、協会が依頼したものも含め、32編を収録した。放射性降下物を「死の灰」と命名した村尾清一・元読売新聞記者、乗組員が入院していた病院からラジオ中継を担当した金澤大作・元文化放送局員などの手記も収録した。
- また、女優・吉永小百合に依頼したところ、映画撮影中のため手記の執筆は難しいがメッセージであればとの申し出を受けた。贈られた色紙には「子供のころニュースで知った第五福竜丸のこと、久保山愛吉さんの死は、私の心に深く残りました。そのことが原爆詩の朗読を始めたきっかけの一つになっています。これからも核兵器のない地球を取り戻すため ねばり強く頑張りたいと思います 吉永小百合」とある。
- (17) 第五福竜丸平和協会編・発行『開館30周年記念誌 都立第五福竜丸展示館のあゆみ』(2006) 関係者による記念座談会、メッセージ、「船をみつめた瞳—来館者の感想から」などが収録されている。1976年開館以来のべ420万人以上が来館しており、来館者ノートのほか、行事ごとのアン

ケート、文集、事前学習の作文、質問やお礼の手紙、寄せ書き、折鶴に添えられたものなど多岐にわたる膨大なものだった。丁寧に読みノートに転記するという根気のいる作業は半年以上にわたった。作業を担われた第五福竜丸ボランティアの会のメンバーにあらためて心からの感謝を述べたい。

- (18) 2004年2月21日、ビキニ水爆被災50周年研究集会(同実行委員会主催・日本平和学会関東地区研究会/NPO法人ピースデポ/環境・平和学会共催)が日本青年館で開催された。第一部ではメアリー・シルク(マーシャル諸島短期大学核研究所所長)、中原聖乃、竹峰誠一郎、山下正寿が報告し、第二部では豊崎博光のコーディネートで前田哲男、横田正樹(フェリス女学院大学教授)によるディスカッションが行われた。第五福竜丸平和協会もこの研究集会に協賛し、筆者も出席した。また、第五福竜丸の被災が報じられた直後に放射能測定を行った西脇安(大阪市立大学・当時、ウィーン大学名誉教授)、科学調査船・俊鶴丸で太平洋の放射能測定に関わった岡野眞治(科学研究所・当時)、大石又七らも参加した。研究集会のもようは竹峰誠一郎が『イアブック核軍縮・平和・自治体2004』(NPO法人ピースデポ)に報告し、『隠されたヒバクシャ』にも再録されている。
- (19) 『廃船』(NHK 1969年3月22日放送)、企画・構成/工藤敏樹。廃船処分となり夢の島に放置されていた「はやぶさ丸=第五福竜丸」と始められたばかりの保存の取り組み、元乗組員の「その後」を追ったドキュメンタリー。工藤の遺族、後輩らによって刊行された『工藤敏樹の本Ⅱフィルモグラフィ』(1995)にシナリオが再録されている。
- (20) 『又七の海〜ビキニ死の灰をあびた男の38年』(NHK 1992年4月19日放送)
- (21) 第2節4ビキニ研の項参照
- (22) 福竜丸だよりNo.269・2000年9月。2007年末現在元乗組員が12名が亡くなっている。
- (23) 「原発導入のシナリオ―冷戦下の対日原子力戦略」(NHK現代史スクープドキュメント 1994年3月16日放送)
- (24) 有馬哲夫『日本テレビとCIA―発掘された「正力ファイル」』(新潮社 2006)
- (25) 「第五福竜丸『書き換えられた日誌』」(TBS・筑紫哲也NEWS23 2006年5月24日放送)
- (26) 「非核への思い語り継ぐ船・第五福竜丸」(NHK首都圏ネットワーク 2006年11月10日放送)、「第五福竜丸を忘れない〜ビキニ事件から53年」(しずおか2007・NHK地上波デジタル 2007年3月2日)でのインタビューに答えている。
- (27) 第五福竜丸から水揚げされたマグロ類は放射能汚染が激しく、東京都中央卸売市場(築地市場)の敷地に埋められた。1954年末までに全国で放射能が測定され廃棄され

た「汚染魚」は約485トンにのぼる。このマグロ騒動を忘れまい、放射能の恐ろしさを後世にも伝えようと、大石又七が全国に「十円募金」を呼びかけ、記念碑「マグロ塚」を作った。築地市場内に設置することを東京都に要望しているが、市場移転整備計画のため、現在第五福竜丸展示館前のひろばに仮設置されている。築地市場正面脇、都営地下鉄大江戸線「築地市場」駅出口に、事件の経緯とマグロを描いたプレートが設置されている。塚を守り継承していくための「築地にマグロ塚を作る会」も結成されている。

- (28) 福竜丸だよりNo.314・2004年11月
- (29) 福竜丸だよりNo.327・2006年3月
- (30) メッセージとシンポジウム「ラッセル=アインシュタイン宣言50年と核兵器問題―被爆60年に考える」での小沼通二・慶応大学名誉教授・世界平和アピール七人委員会事務局長)の講演は福竜丸だよりNo.322・2005年9月に掲載。追悼記事とロートブラット博士からの返信全文は、福竜丸だよりNo.323・2005年10月
- (31) 福竜丸だよりNo.330・2006年8月
- (32) 福竜丸だよりNo.327・2007年6月
- (33) 福竜丸だよりNo.338・2007年7月
- (34) 福竜丸だよりNo.341・2007年12月
(財団法人第五福竜丸平和協会研究員・展示館学芸員)